



▲昭和25年5月10日付の西日本新聞

の名称は「光ヶ丘(大使園)へ向かう」ことで奉仕活動を行っていたところ、鹿児島ラ・サル会の学校を創設することになり、プティさんが抜てきされた。

プティさんは、その依頼に大変びびりしたのを覚えるまでよく考えていた。

第一に年齢の若さ。そして日本語も十分に話せる教育ついでに経験がまったくない。

そんなプティさんを決意させたのが、敗戦に打ちひしがれた日本人の姿だった。

「なんとこの国民の力になりた



戦後日本の 英才教育に献身

鹿児島ラ・サル学園初代校長

マルセル・プティさん

〈モンリオール・小柳美千世〉

何事かと思つた。そのふたりは鹿児島にある開社の記者だった。プティさんが仙石で切符を買った際に、隣に並んでいたのがその新聞社の仙台局員だった。その記者から話を受けたのだ。

プティさんは高層ビルが「鹿児島」の女性に奇麗ですか」と聞いたら「面白かった」と、プティさんは当時を振り返りながらほほえむ。

1950年5月10日付の西日本新聞の紙面に紹介されたラ・サル高校の記事は、プティさんの言葉として「私の教育のプログラムは道徳的、社会的かつ知的に調和のとれた完全な人格を養成することです」と紹介している。

プティさんは、学校創設にあたって粒ぞろい先生と生徒を集

日本人であることに誇り

後こそ皆に明るく接し、教職員・保護者・徒が心ひとつになることを常に掛けていたのだ。

当時の在校生はほとんどが、毎朝行われていたプティさんの英語での5分間スピーチを聞いたフランドルの唱歌「アルエット」ラレルリジャックなどを懐かしく口ずさむことがあるという。これは、フランス系カナダ人なら大人から子供まで誰でも知っている歌である。



▲昨年10月、レジデンスを訪れたラ・サル2期卒業生

めるために奔走した。

遠方より入学する生徒のために、島津別荘を借り受けて寄宿舎とし、学問をする環境を整えた。図書館にはカナダのラ・サルから送られてきた図書3000冊と、新しく購入された日本書2000冊が収められた。校舎にもカナダの信託を受けた寄付で準備された。

1950年1月の開校式には、アメリカの占領下にもかかわらず、アメリの歌を掲げて国歌「君が代」を歌うことを奨励したのもプティさんである。敗戦で意気消沈していた人々に、日本人であることを誇りに思ってもらいたい一心だったそう。

「どういった熱意にこころえるべく、生徒たちは、生懸命勉強をした。プティさん自身も、どんなに忙しいときでも校長室に習いにくるものがあれば、たとえひとりでても個別に教えていた。」

決して不安な世の中だったからこその皆に明るく接し、教職員・保護者・徒が心ひとつになることを常に掛けていたのだ。

当時の在校生はほとんどが、毎朝行われていたプティさんの英語での5分間スピーチを聞いたフランドルの唱歌「アルエット」ラレルリジャックなどを懐かしく口ずさむことがあるという。これは、フランス系カナダ人なら大人から子供まで誰でも知っている歌である。



▲鹿児島ラ・サル学園開校当時のプティさん

進学校として日本全国にその名が知られている鹿児島県ラ・サル学園。

敗戦後の復興がようやく始まった1950年(昭和25年)、モンリオールに本部を持つカトリックのラ・サル修道会(教育事業を天職としている修道会)によって、鹿児島湾(薩江湾)を挟んで正面に校島を見渡せる鹿児島市小松原の海



▲Marcel Petit (モンリオール郊外のラ・サル会レジデンスにて)

岸沿いに設立された。学園には中学校と高等学校の男子校があり、学生寮も備えている。東京大学などへの高い進学率を誇り、卒業生には政・官・財界はもとよりあらゆる分野で活躍している著名人が名を連ねている。

ラ・サル修道会から日本に派遣されて、鹿児島学園を創設した初代校長先生として就任したのが、

マルセル・プティさんである。就任当時32歳。国内で一番若い校長先生だった。

鹿児島市日野市にあるラ・サル修道会に移り、理事長として鹿児島と函館の両校、および仙石の孤児院を管轄する任務に就いた。1

敗戦後の日本に学校を

プティさんは1918年、8人兄弟の末っ子としてモンリオールで生まれた。

プティさんが通ったのがラ・サールの小中学校だった。修道士の献身的な姿に感銘を受け、プティさん自身も修道士となって教育家を目指すことになった。

その後、アメリカに渡ってラ・サールの大学で修士課程を修了し、アメリカで教育者としての道を極めたいと思っていたプティさんのところに、ある日日本に行つてほしいとの依頼が舞い込んできた。

戦後の日本復興に力が必要なアメリカでマック・サー元帥がラ・サル会へ修道士の派遣を要請したのである。

建造物の復興のために必要なク平やガラスのほか、「自らの食料は自分で持つていくように」という指示だったため、住居を買い込み、サンフランシスコから船に乗って日本へ。

着いてすぐに宮城県仙台市にある孤児院「サールホーム」開所時

988年には日本政府の叙勲で勲四等旭日小綬章を受賞し、5年前にカナダへ帰国した。

現在は、モンリオール郊外にあるラ・サル会のレジデンス養老院で静かな余生を送っている。

「毎日明かす」

とときは、近くの日食レストランで好物のマグロ寿司を食べ、毎週土曜日夜8時はテレビ番組「スナック」に入居している間と乾杯をするのを、何よりも楽しみにしているプティさん。

最後に健康の秘訣を聞いたところ、「毎日明るく(に)こに、昨日の問題は忘れて新しい日を大切に過ごしてください」という答えが返ってきた。

ファミリー・スピリット

プティさんが目指したものは、ファミリー・スピリットに根ざした学校を作ることだった。

開校当時、プティさんは各クラスにクリスマス時に飾を用意し、その箱の中に、自分たちよりも貧しい人たちのために分け与えられるものを入れたためだった。

それが現在は、毎年1月に開催される「クリスマス・バスケケット・バザー」となって、収益金が世界各国に寄付されている。

また、卒業生からの寄付や在校生へのさまざまな援助が絶えないという、卒業生の間では、年代に関係なく機会があればいつでも集まって親交を深めているそうだ。

プティさんは、カナダに帰国する際に卒業生の有志から送られた個別で「コミュニティ」を購入した。それは、日本から遠く離れた地でもエムールによって業生との交流を続けるためだった。

昨年10月には、ラ・サル校2期生とその家族が、時の中山成彬文部科学大臣、伊藤博文鹿児島県知事、森博幸鹿児島市長、いすゞモーターラ・サル高校OBのメッセージを携えてプティさんを訪問するツアーを実施、モンリオールを訪れた。今年6月には4期生がプティさんを、そして自身が描いたファミリー・スピリットの夢が達成されたことから感謝し、ラ・サル学園に携わる人々を誇りに思っている。